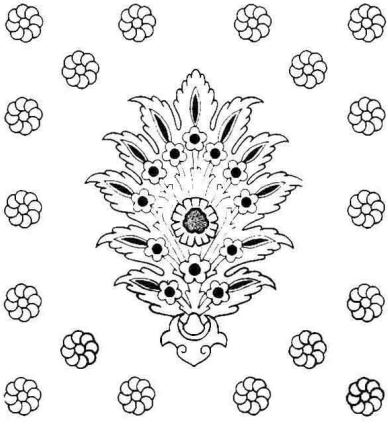
埴谷雄高

堀田善衛

日本文学全集

日本文学全集 84

埴谷雄高
堀田善衛



集英社

日本文学全集
全88巻

84 埴谷雄高
堀田善衛集

昭和四十七年十一月一日 印刷
昭和四十七年十一月八日 発行

著者 埴谷雄高
堀田善衛

発行者 陶山巌

発行所 株式会社 集英社
〒101 東京都千代田区一ッ橋二ノ五ノ10
電話 東京(265)六二二 振替 東京 一五六五三

印刷 大日本印刷株式会社
本文用紙 日本パルプ工業株式会社

著者との了解により検印廃止いたします。
落丁本、乱丁本はお取りかえいたします。

©1972 Printed in Japan

0395—157084—3041

編集委員

伊藤　整
井上　靖
中野好夫
丹羽文雄
平野　謙

装幀　後藤市三

挿絵　永田力

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

埴谷雄高集

死霊　七

堀田善衛集

歯車　二五三

広場の孤独　三〇九

断層　三八一

黄塵　三九五

風景異色　四一一

注解　四三二

作家と作品　本多秋五　四四六

年譜　四八六

埴谷雄高集

満たされぬ魂
それが事物の
変化の原動力
である

埴谷雄高

死　霊

自　序

ここにやっと序曲のみまとまったこの作品について、その意図を述べるつもりはない。けれども、この作品が非現実の場所を選んだ理由についてはいちおう触れておきたい。開巻冒頭にこの世界にありえぬ永久運動の時計台を掲げたのは、*nowhere, nobody の場所から出発したかったためであり、また、そのような小さな実験室を設定することなしにこの作品は一歩も踏みだしえなかったのだから。

非現実――この言葉はそれ自身多くの問題を含んでいる。私自身の解釈によればこうである。そこは虚妄と真実が混沌たる一つにからみあった狭い、しかも、底知れぬ灰色の領域であって、厳密にいえば、世界像の新たな次元へ迫る試みが一歩を踏みださんとしたまま、はたと停止している地点である。いわば、夢と覚醒の間に横たわる幅狭い地点である。私はかかる地点を愛する。けれども、また同時にかかる地点から一歩も踏みだしえない自身に私はいらだつ。私はそこから一歩も踏みだしたくない。にもかかわらず、私はその一歩を踏みださねばならない。

一種ひねくれた論理癖が私にある。胸をうつ一つの感銘より思考をそそる一つの発想を好むばかげた性癖である。極端に言えば、私にとってはすべてのものがひややかな抽象名詞に見える。もちろん、そこから宇宙の涯へまで拡がるほどの優れた発想は深い感動からのみ起ることを私は知っている。水面に落ちた一つの石がしだいに拡がりゆく無数の輪を描きだす音楽的な美しさを私は知っている。にもかかわらず、私はできうべくんば一つの巨大な単音、一つの凝集体、一つの発想のみを求める。もしこの宇宙のいっさいがそれ以上にもそれ以下にも拡がりえぬ一つの言葉に結晶して、しかもその一語をきっぱり叫びえたとしたら――そのマラルメ的*願望がたとえ一瞬たりとも私に充たされえたとしたら、こんなだらだらと長い作品などいたずらに書きつづらなくともすむだろう。私はひたすらその一語のみを求める。けれども、おそらくその出発点が間違っている私にはその一

つの言葉、その一つの宇宙的結晶体はつねに髪一筋向うに逃げゆく影である。架空の一点である。ついに息切れした身をはたと立ち止まらせる私は、あるときは呻くがごとく詠嘆し、またあるときは限りもなくいらだつ。そして、ついにまとまった言葉となりえぬ何かがそのとき棘のような感嘆詞となって私から弃しりでる。すなわち、ach と pfui! 私にとって魂より弃しりでる感情はこの二つしかなく、ただそれのみを私は乱用する。

このような忌むべき事態は、もちろん、私個人の歪んだ能力に由来するに違いない。と同時に、そこには私たちが置かれた不幸な位置というものもある。たとえば、『大審問官』を読むとき私が肌身に覚えるのはそのような荒涼たる場所である。説き去り説き来たって懸河のごとく弁証する大審問官に対してキリストは最後まで黙して答えない。Dixi（説き終った）という言葉が吐かれたとき、キリストははじめて永年の霜を置いたような大審問官の唇にぴくりと接吻する。偉大なる憂愁につつまれた大審問官の魂がそのとき雷撃をうけたように震撼する。その魂はたしかに震撼せざるを得ない。なぜならキリストの無言の接吻のなかには瞑想と殉教と流血に積み上げられた数千年の歴史が結晶しているのだから。そして、そのとき、私たちは知る、『大審問官』の作者の苦悩がいかに深く強烈なものであれ、彼はなお（私たちと較べてより強烈に幸福なことには）腕をうちおろせばかちんとうちあたってはねかえる数千年の堅固な実体の上に支えられていることを。もしこの私たちが一つの底知れぬ重味をもって沈黙しつづけるキリストを描くとすれば、その作品中に数千年にわたって積み上げられた歴史をも創りだしてみせねばならない。それは疑いもなく不可能である。私たちは巨大な幅広い人類史のなかに投げこまれた一匹の哀れな鼠のごとくにデモクリトス*からヘェゲル*へ至るまでの厖大な積荷の間をちょこちょこ嚙り歩いた。けれども、一つの積荷からぼろくずをひきずりだすごとくに忽慌とつっ走り、一つまみの断片のみを口に含んで踊った私たちはいまだにその一つ一つの味を詳かにせぬ。私たちはちゃちなソクラテス*であると同時にちゃちなソフィスト*の徒であり、一瞬合理的でまた一瞬非合理的で——要するに単純素朴なてんやわんやなのであって、一貫せる論理的思考の持続にはとうてい耐えられぬというのが私たちの精神の位置である。けれども、私たちの不幸は私たちが毅然確固たる実体の上に立脚していないことなのではない。もし私たちが風のごとき気分のみにまかせるたんなるてんやわんやの徒であるならば、そこにはまた不幸な事態も幸福な境地も何ら問

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

題になりえないだろう。私たちにとっての不幸は、私たちがその発想を最後までつきつめえぬてんやわんやの徒であるにもかかわらず、なお私たちに一定の受容能力が備わっているという一点にある。大審問官の論証をみずから築きえぬにもかかわらず、その偉大なる憂愁はその皮膚に感得される——これが私たちを未来へひきずりゆく不幸である。

それは前へひきずりゆく不幸である。苦難な未来へ踏みださなければならぬ不幸である。とうてい動かしえぬ手足をなお動かさなければならぬ不幸である。私個人について言えば、私は『大審問官』の作者から、文学が一つの形而上学たりうることを学んだ。そして、その瞬間から彼に睨まれたと言いうる。私は彼の酷しい眼を感ずる。絶えざる彼の監視を私は感ずる。ただその作品を読んだというだけで私は彼への無限の責任を感ぜざるを得ないのである。それはいかに耐えがたい責任であることだろう、とうてい不可能な一歩をしかも踏みださねばならぬということは。私はついにせめて一つの観念小説なりともでっちあげねばならぬと思い至った。やけのやんぱちである。けれども、その無暴な試みのいかに羸弱なことであるだろう。たとえば、私がこの作品中に扱った《虚体》というばかげた観念をとりだしてみてもよい。このわずか一語に到達するためには、私には私なりの苦労がなかったわけではない。けれども、ひとたびその語が白紙の上に書き下されてしまえば、それは他のさまざまな観念のなかに泡のごとく消え失せてしまってもはや跡形もない。微風のなかに揺れている一本の枯れた樹ほどの持続する表現力も持ちえないのである。重味なき観念のもろさである。とはいえ、私はその脆い砕けた場所から出発せねばならない。

このような荒涼たる場所に置かれたとき先人たちがいかなる方法をとったかを見たとき、私には一つの姿勢が目にとまった。そこにはさまざまな型があり、あるものはそこで地上に密着する蘚苔植物的に生きのびていたが、あるものははじめから枯死の擬態をとって立っていた。擬態——そうである。特殊な風土のなかにとにかく一本の樹幹を延ばした形で立っているその姿勢に擬態という名称を附しておそらく誤りではないだろう。死んだ真似でもしていなければとうてい自身が持ちきれなかった彼らの精神に深い興味を覚えたばかりでなく、遺憾なことには、私はそうした姿勢に親近性のみ感じた。そうである。それは遺憾な親近性であった。なぜならベェコ*ンによってすでに数世紀前に撃破された洞窟の偶像がなお私たちのうちにとぐろを捲いているのを私は感じたか

ら。けれども、ということはまた同時に、うまく死んだふりをしてみせる隠れ蓑を私自身たとえ神の目を盗んでも案出すべきやけのやんぱちな衝動を感じたということもまったく同じことであった。その遺憾なやけのやんぱち的心情の分析にはここではたちいる必要もない。私があえてここで触れたいのはその結末の姿勢だけである。その結果、私がとったのは次の三つの方法なのであった。すなわち、極端化と曖昧化と神秘化——。

前述したごとく私には一種ひねくれた論理癖がある。せめて徹底できるところまで踏みこみたい。もし不可能ならば、ごまかしてでも通りぬけたい。ごまかしが見抜かれてもなんとか灰色のヴェールをかぶせておけ。以上が私を支えている体系である。こんなたよりない中世の呪術的方程式に従ってとにかく私流の一貫性を保っているのが、私の示しうる唯一の姿勢なのであった。明晰と厳密——いまだ私の精神を飾っていないその協和音を渇し求めていないわけではないけれども。この場合、あとに並べられた二つの方法はいわば比較的単純な擬態法であってほとんど説明を要しない。つまり、作中随所に見られるごとく、*als ob の濫用、反覆の濫用、ある期間までの心理描写の省略、探偵小説的構成等々。けれども、第一にとりあげられた極端化の方法については、非現実の場所をこの作品が出発する場所と述べた以上その大要を説明しておかねばならぬ。一般的にいって、思考は本来事物の根源と極限へまでひたすら辿りゆくものであるから、あえて極端化と呼ばずとも、思考本来の道行きをそのまま辿りゆけば、しばしば、いわゆる思考実験の領域へまで踏みこむに至るのだろう。私のひそかな願望はかかる実験をここで行ないたいということのみにかかっている。けれども、ひねくれたちゃちな論理癖しかもたぬ私はただ私流の極端化の原則を歪んだ形で貫ぬくばかりである。しばしば私が行なうそれは、もしそういってよければ、妄想実験の領域に属すると規定してよい類のものである。そうである。そして、それはそれ以外の何物でもない。そして、このような愚かしき無力な実験遂行のゆえにこそ非現実の場所から私は出発しなければならなかったのである。

かつて耆那教の聖典に接したとき、私には一つの奇妙なヴィジョンが浮んだ。耆那教とは印度古来より現在までもひきつづいている戒律酷しい一教団であって、かつて私が述べるような事実など存しなかったが、私は私自身の法則に従ってその素朴な教義を私流の領域へまで極端化してみたのである。そのとき浮かび上ってきたヴィジョンとはこうである。その教団はそのころ餓死教団と

いわれていた。着ること飲むこと食うことはおろか呼吸すらその信徒たちは禁ぜられていた。したがって、教団の信徒たちが集り籠もっているある高山へ登りゆくと、その途上のここかしこにミイラ化しあるいは風化したひとびとの屍体が無数に見受けられた。けれども、いかなる理由によるのか、該教団の始祖大雄のみは深く暗い洞窟の奥にその瞑想的な眼を光らせて生きていた。菩提樹の下で釈迦が正覚し無窮の碧空を眺めあげたとき、ふと想いだしたのがこの大雄である。（事実においては彼らの年代は遺憾ながらややずれていて彼らは互いに相知らなかったが、私の極端化の法則はここでも時間的、空間的な事実の拘束など無視する）ヒマラヤに似た美しい白い雪をかむったその高山へ辿り着いた釈迦は深く暗い洞窟のなかへ大雄の前まで静かに進んでゆく……。これが私のヴィジョンの出発点である。この釈迦と大雄の対話の章は作中人物が語る一つの物語としてこの作品の最後近く現われるはずであって、この作品全体の観念の中心をなしている。この作品が非現実の場所から出発するというとき、その設定には、登場人物たちがフィルムの陰画のごとく暗く処理されるという意味も含められているのであるが、かかるネガティヴな作中人物たちの中心に坐っているのが全否定者大雄なのであって、彼らは彼の観念の部分をそれぞれ担って歩いているにすぎない。

さて、そうであるとして——。

宇宙の涯から涯へまで響きゆく一つの巨大な単音の幅を検証すること、それはたしかに一つのヴィジョンにほかなるまい。それはたしかにあらゆる先人たちをひきずり歩ませた一つの光源にほかなるまい。けれども、もしこの光栄ある用語があまりに暗すぎる私の領域に似合わしからぬとすれば、私は私自身の用語をもって、それを一つの架空凝視と名づけてもよいのである。私の魂は、広大な真空の一点にはたと立ち止まる。私は、架空を凝視する。そして、そこに行なわれる一種の精神の体操、私はここに設定された小さな実験室がもつ意味をそれ以上に予定していない。巨大な*サイクロトンや*ダイナモが旋回する現代、もののしい*ランビキや*フラスコをごたごたと並べたてて効果零の古ぼけた*錬金術にとりかかった以上、そのほかにつけ加えるべき意味などありえないのである。

私が本巻を序曲と呼ぶ理由は、てんやわんやの息切れする能力をもってとにかく三つの主導音をここにうったというだけの理由である。第一から第三主題の展開へいたるまで。だが、まだ何事もはじまっていないのである。この作品が扱うのは五日間の出来事であるが、だら

だらと長いスタイルで書きつづけているため、この序曲を終ってようやく第一日目の夕方まで達したにすぎない。徹夜など気にもかけず飛びまわりたがる作中人物たちの気配を窺い看るとき、前途のはるかさにいささか恐慌の情を禁じえない。

悪意と深淵の間に彷徨いつつ
宇宙のごとく
私語する死霊たち

一

最近の記録にはかつて存在しなかったと言われるほどの激しい、無気味な暑気がつづき、そのため、自然的にも社会的にも不吉な事件が相次いで起ったある夏も終りのある曇った、蒸暑い日の午前、××風癲病院の古風な正門を、一人の痩せぎすな長身の青年が通り過ぎた。

青年は、広い柱廊風な玄関の敷石を昇りかけて、ふと立ち止った。人影もなく静謐な寂寥たる構内へ澄んだ響きをたてて、高い塔の頂上にある古風な大時計が時を打ちはじめた。青年はじっと塔を眺めあげた。その大時計はかなり風変りなものであった。石造の四角な枠に囲まれた大時計の文字盤には、ラテン数字でなく、一種の絵模様が描かれていた。注意深く観察してみるならば、それは東洋における優れた時の象徴——十二支の獣の形をとっていることが明らかになった。青年はしばらくその異風な大時計を眺めたのち、玄関から廊下へすり抜けて行った。

この青年、三輪与志が郊外にある××風癲病院を数度にわたって訪れなければならなくなった用件というのは、彼のかつての親友で、またその後、兄の知人ともなったらしいある不幸な、孤独な精神病者の委託についてであった。幸いなことに、この病院に勤務している一人の若い医師が、三輪与志の兄三輪高志の学生時代の顔見知りであったので、患者の委託についてさまざまな便宜をはかってくれたばかりでなく、進んで患者の担任をすらひき受けてくれたのであった。

その不幸な精神病者は、やはり郊外にあるある刑務所のなかで、不明瞭な原因からきゅうに狂気の徴候を表示したというのである。狂気の徴候を表わしたといっても、見廻りの看手に発作的な暴行を加えたとか、なにか妄想に憑かれて曖昧な言葉を述べはじめたというわけではなかった。昔から黙りがちな青年であったが、その刑

務所へ送置されてからしだいに深い沈鬱状態に陥り、ついにまったくの無言状態をつづけるに至ったと言われている。それは一種の言語喪失の症状なのであるが、通常の健康状態を保っていた以前から沈黙がちなもの静かな青年であっただけに、いつごろから彼を発狂者として認定すべきか、書類作製に際して担当係員も少なからず困惑したとのことであった。

彼の狂気がはじめて問題になったのは、ある蒸し暑い日の午後、温厚な人格者であると評判されていたかなり老人の刑務所長が未決囚たちの房を各個に見廻って、暑さへ向っての健康について二三の注意を与え、未決囚たちの独居生活を元気づけて歩いた際、彼がその老所長に対して失礼な振舞いをしたことから端を発したと言われていた。しかし、温情をその全生涯の標語としてきたという老所長を無視したような粗暴な言動が示されたのではなく、老所長が独房内に端座している彼に丁寧に話しかけたとき異常に嗤いはじめただけという話もあった。しかも、この停年前の老刑務所長はあまりに穏やかすぎてなにかしらからかってみたくもなる人物だとの噂も他方にあり、彼は黙ったまま奇怪な様子で嚇しつけたのだと、真実らしく述べる者もあった。

これらの話は、三輪与志が、仮釈放される兄の荷物を待合室まで運んできた雑役夫たちから聞いたのである。とにかく老所長の訪問に際して事件があったことだけはたしかであった。老所長はただちに担当看手を呼びつけ、このような状態に至るまで無責任に放置しておいた怠慢ぶりを叱ったそうである。三輪与志が看手長から聞いた話によると、老所長はその場からみずから医務室へ赴いて、『国家から保護を委託されている大切な人物』について、医師たちと心からなる相談をこらしたとのことである。医師たちの診察が行なわれると、しかし奇妙なことに、一人の医師が、彼には失語症の傾向もまた重い気鬱症の徴候も認められず、全体としてなんら発狂の症状はないと、強硬に主張したそうである。それだのに、いかなる理由でか、彼はやがて刑務所内の一病舎へ移管されたのであった。一年以上の長い期間そこへ放置されていたのであるが、彼がその病舎でいかなる扱いを受けていたかは明らかでない。

ここで注意しておかねばならぬことは、やはりその同一病舎に病臥していた三輪与志の兄三輪高志が、病状の進行の結果、執行停止となり仮釈放されたのが、不幸な精神病者、矢場徹吾がその病舎へ送られていたその期間内であったということである。

さて、三輪与志と矢場徹吾の関係についてちょっと説

明しておこう。

矢場徹吾が高等学校を去った理由には、やや不明瞭なものがあった。学校当局がその事件に対し処置した決定はおそらく正当であったろうが、失踪に際しての矢場徹吾の心理が説明しがたいものであった。

ある秋の午後であった。町から学校の寄宿舎への帰途、黄ばんだ葉々をつけた樹々の密生している公園の境にさしかかって、三輪与志と矢場徹吾はふと佇んだ。動物がそれによってなりたっているような気味悪く訴える低い、地を這うような締めつけるような、唸り声が公園のなかから聞えてきた。二人は重苦しく顔を見合わせると、すでにかなりの人々が足を止め、粗らな円をつくっているその場へ近づいて行った。

*クレチン病を患って畸形に発達した子供にこんな風貌があるといわれる。一瞥しただけで、奇怪な印象を受ける子供であった。頭から眼、鼻、口、さらに軀幹と、そのすべてが正常な釣合いがとれぬというより各自がそれ自身の奇怪な個性をもって勝手に発達しきったふうに見える……。愚鈍と一瞬にして深く印象されるが、それにしてもなにか厭らしい無気味な後味がそこに残った。そんな子供が一匹の大きな尨犬をむごく扱っているのであった。

まだ六つくらいにしか見えなかったが、痙攣するような激しい力で、ほとんど自身と同じ背丈の大きな尨犬の耳をひっぱっていた。その子供は苔のたまった白っぽい舌を垂れていた。そして、尨犬の苦しげな唸り声が奔しるような悲鳴へ高まると踊り上って嬉しげにその両足を踏みしめた。そんなとき、その子供の鈍い瞳は生き生きと光ってさえ見えた。哀れな尨犬の哀れな耳朶は、ちぎれるばかりに張りつめられていた。しかも、耳朶の上部に赤黒い皮膚病のかさぶたが一つの乾いた隆起を形造り、哀れな尨犬の窶れた風体を、さらに悲惨にしていた。その尨犬は、このような苛酷な扱いに日ごろから慣らされているのか、いつまでも、じっと身動きもせずに竦みたっていた。しかし、激しい苦痛にはやはり耐えきれなかったのである。首を前方へ持ちあげ悲しげにしばたたかせる乳白の瞳が霑んでくると——大粒の涙が湧きでてきた。……その表情の推移は、ほとんど一人のうちひしがれた人間の激しい苦悩を連想させた。

すると、事態が変った。閃くように子供のかたわらへ進みよると、気味悪げに眺めている人々があっという間もなく矢場徹吾はその子供の耳朶を両手で把んで引きあげた。足が地上から離れもせず、自身の重さにぶらさがるといったふうに、その子供の軀は矢場徹吾の胸脇へず

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com